

三島由紀夫「美しい星」の基礎的研究 その一

——円盤運動の影響について——

及川俊哉

一、はじめに

私はこれまでの研究で三島由紀夫の小説「美しい星」が新約聖書におけるキリストの生涯記に題材をとった作品であることを明らかにした^①。しかし、なぜ円盤や宇宙人を題材とした本小説がキリスト教と関係するのか、という問題が未解明であった。私は「美しい星」はいくつかの「層構造」を持った作品であり、大まかに三つの層に分かれると考えている。三つの層とは「円盤運動の層」「キリスト生涯記の層」「核兵器による滅亡論の層」である。このそれぞれの層の相互関係の複雑さが原因となつて、本作品の適切な理解を難しくしている。これら三つの層それぞれが難解な問題を含んでいる上に、なぜそれらが同じ作品の俎上に乗せられるのかという、共約可能な公分母が見え難いものであるからだ。

そのため、これらの層を、一つ一つ切り分けて、丁寧に分析していく必要がある。その上で改めて総合的に読解するという手続きを経なければ、本作品を正しく読解することはできないと私は考える。

そこで、今後発表機会が有り次第、数回に分けて「美しい星」作成にあたり三島が参照した資料を検討し、作品成立の背景を明らかにしていこうと考えている。「美しい星」の「核兵器による滅亡論の層」を分析することは冷戦期の日本の原爆文学を研究する上では非常に重要な仕事になつてくるが、この課題に向き合う前に先の二つの層に存在する問題を解決しなければならぬ。そのため、今回はまず、作品と当時の円盤運動^②との関りについて明らかにする。また円盤運動とキリスト教の関連についてもある程度検討する。その方法として三島由紀夫の「蔵書目録」^③から、円盤関連の書籍を取り上げ、どのような円盤運動が本作品の発表当時に展開されていたか、また三島がそれらの論をどのように参考にしたのかを明らかにする。最初に欧米の円盤運動の歴史について概略を説明し、次に、日本における円盤運動の受容について述べる。あわせて円盤運動の主要人物であるG・アダムスキと北村小松についても紹介する。また従来「美しい星」への影響が指摘されていた円盤運動団体「CBA」との関わりについても考察する。以上を踏まえて今後「美

しい星」と三島の宗教思想とその文学作品の関わりを考察していくための基礎的研究を行う。

二、円盤運動の発生と日本への伝播

(1) アメリカでの円盤運動の発生と「蔵書目録」掲載書籍の検討

「美しい星」を理解するためには、円盤運動がどのようなものとして三島由紀夫に認識されていたのか、円盤運動がどのような社会的背景をもって登場し、発展しながら日本に伝播してきたのか、把握しておく必要がある。しかし円盤運動の歴史は複雑多岐にわたっており、その内容を解明することは難しい。そのため、ここでは「美しい星」の作品成立に関わる円盤運動だけに的を絞って論述していく。

円盤運動は二〇世紀半ばのアメリカで始まった。この活動は大きくG・アダムスキの出現以前と以後に分けて考える必要がある。まずG・アダムスキ以前の状況について述べる。

一九四七年に「ケネス・アーノルド事件」が起きた。これは、実業家のケネス・アーノルドがワシントン州上空を自家用飛行機で飛行中に奇妙な飛行物体を目撃したというものである。この事件を報じる記事の表現からこれ以降「空飛ぶ円盤 (Flying Saucer)」という用語が定着し、目撃例が数多く報告されるようになった。一九四八年には「マンテル大尉事件」が起きた。これは、ケンタッキー州上空での飛行物体発見の報告を受け、米軍のマンテル大尉が戦闘機で発進したが、追跡中に墜落したという事件である。こうしたことから、円盤を観測し正体を知りたいと思う人々が多く現れ、研

究組織を作ったり書籍を出版したりするようになった。一九五〇年にはドナルド・キーホーが『空飛ぶ円盤は実在する (The Flying Saucers are Real)』を出版しベストセラーになった。

こうした状況に拍車をかけた人物がG・アダムスキである。G・アダムスキは一九五三年に『空飛ぶ円盤実見記 (Flying Saucers Have Landed)』をD・レスリーとの共著として出版した。この中でG・アダムスキは円盤から降りてきた宇宙人と会見したという主張を行った。G・アダムスキの影響は大きく、これ以後、同様に宇宙人と会見したと主張する者の書籍が世界各地で出版されるようになった。一方、後述するように識者のみならず既存の円盤運動家の中からもG・アダムスキに対する批判が現れるようになった。

次に、三島由紀夫の「蔵書目録」から、書籍題名に「円盤」という語があるものを抜き出し、日本での出版年順に列記する。なお、記載にあたっては「蔵書目録」での表記と、筆者が参照した書籍の奥付を比較できるように併記した。引用に際しては、奥付に記載されている情報のうち、三島蔵書中の書籍と対照できる部分を中心に転記した。作者名・作品タイトル・年号表記などについては書籍と「蔵書目録」の間で表記に揺れがあるが、それぞれの記載の通り転記する。煩雑になることを防ぐため、特に必要な場合を除き、本論文内で頻出する書籍名に関しては妥当と思われる省略表記で統一する。

① A・ミシエル『空飛ぶ円盤は実在する』

【三島由紀夫蔵書目録】

ミシエル (A) 「空飛ぶ円盤は実在する」 田辺貞之助訳 高文社

S 31・9・25

【及川参照本】

Author: Aimé Michel

Title: Lueurs sur les Soucoupes Volantes

Publisher: A. P. I. A.

空飛ぶ円盤は実在する 訳者田辺貞之助 高文社 昭和31年6月25日 第1刷発行

②T・ベサラム『空飛ぶ円盤と宇宙』

【三島由紀夫蔵書目録】

ベサラム(T)「空飛ぶ円盤と宇宙」久保田八郎訳 高文社 S 32・11・20

【及川参照本】

Author: Truman Bethurum

Title: Aboard A Flying Saucer

Publisher: De Vorss & Co.

空飛ぶ円盤と宇宙 訳者久保田八郎 高文社 昭和32年11月20日 第1刷発行

③平野威馬雄編『これが空飛ぶ円盤だ！』

【三島由紀夫蔵書目録】平野威馬雄編「これが空飛ぶ円盤だ」

高文社 S 35・4・1

【及川参照本】

これが空飛ぶ円盤だ！ 編者平野威馬雄 高文社 昭和35年4月1日 第1刷発行

④平野威馬雄編『それでも円盤は飛ぶ！』

【三島由紀夫蔵書目録】

平野威馬雄編「それでも円盤は飛ぶ！——日本における空飛ぶ円盤」高文社 S 35・5・1

【及川参照本】

それでも円盤は飛ぶ！ 編者平野威馬雄 高文社 1960年4月1日 初版第1刷発行 1972年9月5日 初版第6刷発行
※一九六〇年は昭和三十五年、一九七二年は昭和四十七年。
※奥付にはないが、書籍中には「それでも円盤は飛ぶ！——日本における空飛ぶ円盤」とサブタイトルも記載あり。

⑤G・アダムスキ D・レスリー『空飛ぶ円盤実見記』

【三島由紀夫蔵書目録】

アダムスキ(G)、レスリー(D)「空飛ぶ円盤実見記」高橋豊訳 高文社 S 35・6・5

【及川参照本】

Author: D. Leslie & G. Adamski

Title: Flying Saucers Have Landed

Publisher: Werner Laurie

空飛ぶ円盤実見記⁽⁴⁾ 高橋豊訳 高文社 昭和31年3月20日発行

⑥G・アダムスキ著『空飛ぶ円盤の真相』

【三島由紀夫蔵書目録】

アダムスキ (G) 「空飛ぶ円盤の真相」久保田八郎訳 高文社 S
37・9・20

【及川参照本】

空飛ぶ円盤の真相 訳者久保田八郎 高文社 昭和37年9月20日

⑦C・アリングガム著 『火星からの空飛ぶ円盤』

【三島由紀夫蔵書目録】

アリングガム (C) 「火星からの空飛ぶ円盤——続・空飛ぶ円盤実見記」岩下肇訳 高文社 S42・8・1 重

【及川参照本】

Author: Cedrick Allingham

Title: Flying Saucer From Mars

Publisher: Frederick Muller Limited

火星からの空飛ぶ円盤 昭和42年8月1日 第4刷発行 訳者岩下肇 高文社

※奥付にはないが、書籍中には「火星からの空飛ぶ円盤 続・空飛ぶ円盤実見記」とサブタイトルも記載あり。ただしダッシュ表記は無し。

なお、「美しい星」は昭和三十六年十一月十四日に起稿、三十七年八月三十一日に脱稿し、雑誌「新潮」に昭和三十七年一月号から十一月号まで発表された⁶⁾。したがって、執筆時期からはずれる⑥⑦に関しては分析対象から除外する。

この中で三島自身による言及がある書籍はA・ミシエル著『空飛ぶ円盤は実在する』のみである。この文献に関しては後に詳述する。

また、「美しい星」本文には主人公の大杉重一郎が参照している円盤関係の書籍として次のような記述がある⁶⁾。

——講演会が二日のちに迫った深夜、重一郎は書籍でたくさん参考書や、スライド用の円盤写真をちらかした中で、一心に草稿を練り直していた。ケネス・アーノルドの「空飛ぶ円盤——われこれを見しとき」だの、ドナルド・キーホーの「空飛ぶ円盤は実在する」だの、ウキリアム・ファーガソンの「宇宙よりのメッセージ」だの、円盤研究に欠かすことのできない書物の数々から、豊富な引用をして、草稿の興趣を増そうと努めた。

これらの三冊の書籍は、全て「蔵書目録」に記載されていない。しかし、「蔵書目録」は外国語原書を除外するという編集方針であったため、これらの書籍を三島が所蔵していた可能性はある。「蔵書目録」掲載の書籍と併せて原著の出版年代順に記載すると以下の通りになる。なお、特に注記がない場合、著者はすべてアメリカ人である。

一九五〇年 ケネス・アーノルド著 『空飛ぶ円盤——われこれを見しとき』

一九五〇年 ドナルド・キーホー著 『空飛ぶ円盤は実在する』

一九五三年 G・アダムスキ D・レスリー 『空飛ぶ円盤実見記』

(George Adamski, Desmond Leslie, "Flying Saucers Have Landed")

一九五四年 A・ミシエル著 『空飛ぶ円盤は実在する (Aimé Michel, "Lueurs sur les Soucoupes Volantes")』

【著者はフランス人】

一九五四年 T・ベサラム著『空飛ぶ円盤と宇宙(Trunan Behurum, "Aboard a flying saucer. Non-fiction; a true story of personal experience")』
一九五四年 C・アリンガム著『火星からの空飛ぶ円盤(Cedric Allingham, "Flying Saucer from Mars")』【著者はイギリス人】
一九五五年 ウィリアム・ファーガスン著『宇宙よりのメッセージ』
一九六〇年 平野威馬雄編『これが空飛ぶ円盤だ!』【著者は日本人】
一九六〇年 平野威馬雄編『それでも円盤は飛ぶ!——日本における空飛ぶ円盤』【著者は日本人】
一九六一年 G・アダムスキ著『空飛ぶ円盤の真相(George Adamski, "Flying saucers farewell")』

本論考ではこれらの書籍が「美しい星」との関連が考えられる対象文献となる。そこでこれらの書籍と「美しい星」の関連性の重要度を順位付けしていく。この際、最も重要な書籍は、作品本文中に記載されたケネス・アーノルド著『空飛ぶ円盤——われこれを見しとき』、ドナルド・キーホー著『空飛ぶ円盤は実在する』、ウィリアム・ファーガスン著『宇宙よりのメッセージ』の三冊である。しかし、これらの書籍は「蔵書目録」には記載がない。そのため、文献的に影響関係を確定することができない。したがって、今回はこの三冊の書籍も検討対象から除外する⁽⁷⁾。

次に重要な書籍は三島の言及があるA・ミシエル著『空飛ぶ円盤は実在する』である。本論考では「美しい星」への直接的な影響関係は主にこの書籍から分析していく。

これ以外の書籍は、三島の著作において記載がないため、直接影

響関係を論証することができない(「蔵書目録」によって、所蔵していたことはわかるが、三島が読んでいたかどうかまでは不明なため)。ただし、内容的にA・ミシエルの書籍と関連する部分がある。したがって、A・ミシエルの書籍の関連情報として利用するため、これらの本の内容も分析し、都度参照しながら論述していくこととする。

(2) 北村小松による円盤運動の日本への伝播と三島との関係

北村小松は日本における円盤運動の先駆者のひとりである。「美しい星」執筆以前から、共に円盤観察を行うなど、三島が円盤に関する先達として師事していた人物である。そのため、北村の円盤に関する考え方は、少なからず三島にも影響していると思われる。

北村小松は一九〇一年青森県八戸市生まれの小説家・脚本家で、松竹キネマ蒲田研究所に入社し、日本初の本格的トーキー映画である「マダムと女房」(一九三一年)の脚本を書くなど戦前から執筆活動を行っていた。しかし、戦時中に戦意高揚的な作品を執筆していたため、戦後GHQによって作品が回収指定されるなどした⁽⁸⁾。

北村は、一九四八年にラジオで米軍放送のマンテル大尉の墜落事故を聞いたことが自身の円盤に関する報道に触れた最初の事例だと述べている。これ以降円盤に関する文献資料を収集し、自らも円盤に関わる著作活動を行うようになり、「当時の「空飛ぶ円盤愛好」の著名人の筆頭」「円盤の専門家」⁽⁹⁾と目されるようになった。このため、日本初の円盤研究会である「日本空飛ぶ円盤研究会(Japan Flying Saucer Research Association: JFSA)」の顧問にも就任している(JFSAには三島も入会している)。

北村の円盤に対する立場は、おおむね穏健で現実的なもので、当時開発中だった人工衛星の実験段階のものが目撃されていたのではないかなどと考察している⁽¹⁰⁾。そのため、後述するG・アダムスキらの、宇宙人と会見したという主張には否定的であった。G・アダムスキに対しては「彼の第一著、金星人との会見記はベストセラ―になったそうだが、これは相当面白かった。ところが『宇宙船の内部』を読んでみると、一寸口をアングリとさせられる様なところがあつて、この人物は一体何者だろうと首をひねる。『日本空飛ぶ円盤研究会』でまとめて彼に質問を出すから、質問事項を書いてくれといつて来た⁽¹¹⁾」「わたくしは半信半疑です⁽¹²⁾」などと批判している。また、後述する内容に関わるので「アダムスキーは哲学の先生だが⁽¹⁴⁾」と述べている点にも注意しておきたい。「決定版三島由紀夫全集」において北村の名前が出てくる三島の著作は以下の通り。

- ・「私の見た日本の小社会」〈初出〉キング・昭和32年8月〔『決定版全集』29巻〕
- ・「社会料理三島亭」「宇宙食「空飛ぶ円盤」」社会料理三島亭 〈初出〉 婦人倶楽部・昭和35年1〜12月〔『決定版全集』31巻〕
- ・【書簡】北村小松宛 昭和36年10月1日〔『決定版全集』38巻〕
- ・「空飛ぶ円盤」の観測に失敗して——私の本「美しい星」 〈初出〉 読売新聞・昭和39年1月19日〔『決定版全集』32巻〕
- ・「空飛ぶ円盤と人間通——北村小松氏追悼」〈初出〉 朝日

新聞・昭和39年4月30日〔『決定版全集』33巻〕

- ・「二つの望楼」〈初出〉 毎日グラフ別冊・昭和42年5月1日〔『決定版全集』34巻〕
- ・「三島氏にズバリ10問」〈初出〉 小説セブン・昭和44年7月〔『決定版全集』35巻〕

これらを見ると、三島は北村と自宅で円盤の観測会⁽¹⁵⁾を行ったり、私信を送ったりなど、親しく交流をしているのがわかる。なお、北村の小説⁽¹⁶⁾には「UFO」によつて戦時中に地球外の惑星にさらわれた「大杉」という一家が登場するものもある。「美しい星」の主人公一家の姓が「大杉」であるのは三島から北村へのオマージュであろう。こうした親しい交流があつたことから、三島も北村と同様に、G・アダムスキらへ批判的な見解を持つていただろうと推測される。三島が「美しい星」にG・アダムスキの名を出さなかつたのも、こうした北村やJ.F.S.Aの態度を踏襲しているからだと思われる。

三、「蔵書目録」に掲載されている欧米の円盤関連書籍の分析

(1) A・ミシエル著『空飛ぶ円盤は実在する』について

著者はフランス人。訳者は「訳者のことば」において「綿密な科学的良心と不偏不党の冷静な態度」で語っていると述べている⁽¹⁷⁾。その言葉通り、円盤現象に対して科学的立場から検証しようとしている記述が多い。後述するが、G・アダムスキの金星人との接見の報告などには「途方もない物語」と、否定的立場をとつている。

この書籍からの引用と、「美しい星」の引用とを比較のために併記する。類似する表現には傍線を引いた。今後特に断らない場合本論文中の引用部の傍線は筆者によるものである。

① A・ミシエルの著作の中に「美しい星」で取り上げられている円盤運動家の氏名が見受けられる。

(a) ケネス・アーノルドについて

【A・ミシエルの表現⁽¹⁸⁾】

「空飛ぶ円盤」という言葉を発明したのは、ケンネツス・アーノルドという実業家であったと思う。

【「美しい星」の表現⁽¹⁹⁾】

ケネス・アーノルドの「空飛ぶ円盤——われこれを見しとき」
だの、

(b) ドナルド・キーホーについて

【A・ミシエルの表現①⁽²⁰⁾】

七、私はまた、ドナルド・ケイホー少佐が二冊の著書で報告したことも、円盤委員会やA・T・I・Cがその確実性を保証する場合には、相当考慮に入れた。私のこの態度は決して少佐に対する不信の気持ちを表明するものではない。ケイホーは時として熱情にかられることもあるが、反対に極めて誠実かつ細心な歴史家である。しかし、この私の書物が、フランスでは、最初にケイホーを非難した人々の言葉に感銘した読者を対象とするからである。

【A・ミシエルの表現②⁽²¹⁾】

Aメリカの商務省の航空局の調査課長であったドナルド・ケイホー少佐は雑誌『真理』のために、円盤の問題についての調査を行った。それで、ペンターゴ^マンに対し、幽霊追撃機の事件に関する情報局の正確な報告をしろと申し込んだ。が、その書類は秘密だという返事であった。なぜであろう？

【A・ミシエルの表現③⁽²²⁾】

一、マンテルの飛行機の残骸をうつした写真は、いつまでも秘密にされている。その写真を見せてもらうために、ペンタゴ^マンに対してなしたすべての奔走は、今まで丁寧ながら断乎たる調子でしりぞけられた。ドナルド・ケイホー少佐は『空飛ぶ円盤は存在する』という著書のなかで、そうした努力のむなしかったことを語っている。

【A・ミシエルの表現④⁽²³⁾】

ドナルド・ケイホーは雑誌『真理』のためになした調査において、事を明瞭に理解するために、ワシントンで観察した現象と比較できるように、光る物体をひろうのに必要な気温の転位に最も精通している人々と会見した顛末を報じている。

【「美しい星」の表現⁽²⁴⁾】

ドナルド・キーホーの「空飛ぶ円盤は実在する」だの、

② 「美しい星」と類似する表現
(a) マンテル大尉事件について

【A・ミシエルの表現⁽²⁵⁾】

一九四八年一月七日に、トマス・F・マンテルという大尉が円盤を追いかけていて、命をおとすという事件が起った。

マンテル事件は、その悲劇的な結末のために、この種のもののうちで最も有名な事件である。だが、別の理由によっても有名になる値打がある。それは、この事件ほど、多くの明確でしかもすべて一致した証言が、円盤の現象を詳しく描写したことはないからである。

場所はケンタッキー州のフォート・ノックス、アメリカ空軍のゴドマン基地でのことだった。基地の司令塔の時計が十五時少し前をさしていた。司令塔のなかでは士官の一群が空を監視していたが、空は折しも雲の層に蔽われ、時おり少し青空がのぞく程度だった。士官の一群は三十分ばかり前から熱心に空をにらんでいた。というのも、フォート・ノックスのM・Pから、十四時三十分ごろ、得体のわからない大きなものが町の上空をとんで、ゴドマンの方へ向って行くという通知があつたからである。ところが、M・Pは、国家警察の通達でそれを知つたので、国家警察はゴドマンから百五十キロのところにあるインディアナ州のマチソンで、問題の物体を認めたのであつた。マチソンでは何百という市民もそれを認めた。

司令塔にいたゴドマン基地の士官のうちには、隊長のガイ・ヒックス大佐とその下にウッツ中佐がいた。突然、南方に当つ

て、雲の切れ目に、一見金属性の巨大な物体があらわれ、一瞬太陽にかがやいたかと思うと、すぐに消えた。士官たちは、呆気にとられて、顔を見合せた。それから、たちまち矢つきばやに命令が出され、十秒後には、追撃機F51が三機とびたつて、南方へ突っこんでいった。この三機の追撃機の長はトーマス・F・マンテル大尉だった。三機は相互に、また司令塔とのあいだに、ラジオで連絡した。したがって、ヒックス大佐やウッツ中佐やその他の司令官は、自分の部署にしながら、拡声器から出るマンテルの声をきくことができた。

マンテルとその戦友が何も見ずに雲をのぼって行くあいだに、司令塔の士官らはめいめいの印象を語りあつた。全部のものが見たのだった。

一、その物体は円盤の形をしい、上部は円錐をさがさまにしたぶようであつた。

二、体積は《巨大》だった。

三、円錐の頂点には明滅する赤い斑点がついていた。

突然、マンテルの声が拡声器から鳴りひびいた。「私はいま例の物体をよく見るために、接近しつつあります。その物体はちょうど私の真上にあり、私の機のおよそ半分の速度で走っています。それは金属製と思われ、大きさは怖るべきものです。私は更に近づくために上昇します」

マンテルは言葉を切つた。司令塔のなかでは、士官たちが顔をこわばらせながら、無言のうちに待っていた。

十五時八分になると、マンテルの僚機のひとつが司令塔を呼んだ。彼はその物体を見たのだ。次に第三の追撃機もその

物体をみとめた。しかし、円盤はマンテルに追尾されながら、他の二機をまいてしまった。他の二機は雲にへだてられて、隊長機を見失ってしまった。

司令塔の士官たちはなお一心に耳をこらしていた。五分ほどたつてマンテルの声が聞えてきた。彼は眼前のものにいたく感動しているようであった。

「例の物体は上昇します。速度をまし、私の機と同じ速力ですすんでいます。時速二六〇マイルです。私は七千メートルまで上昇します。それでもなお、あれを捕捉できないなら、追跡を断念します。」

U・S・A空軍本部の発表によれば、これがゴドマン基地へのマンテルの最後の報告であった。それから数分して、司令塔からマンテルを呼んだが、応答がなかった。そこで、ヒックス大佐はすぐ他の二機の追撃機に大尉の搜索を命じた。その一機は一万一千メートルにまで上昇し、南方へ百六十キロ飛んだが、何も発見できなかった。

だが、地上の搜索はもっと収穫があった。マンテルが円盤へ接近するために上昇すると通報してから数分ならずして、彼の飛行機は文字通り空中に雲散したらしい。追撃機F51の残骸が数千口にわたってちらばっているのが発見されたのである。

歴史上最初に行われた空とぶ円盤の追跡は、こうして追跡者の死によって終わった。

このゴドマン基地の悲劇から二時間ほど後、ちょうど日没のころ、なにか分らぬものがオハイヨ州コロンボにあるロックバーン陸軍基地の上を竜巻のような勢で通りすぎた。

【「美しい星」の表現⁽⁶⁾】

ふとした機縁からロンドンで出版された「円盤の故郷」といふ本を読んだのである。

それまで重一郎はほとんど空飛ぶ円盤に関心をもつたことがなかったが、この本の、わけても有名なマンテル大尉事件に関する記述を読んだときから、その信憑性は疑ひの余地がないやうに思はれた。

マンテル事件とは、一九四八年一月七日に、北米ケンタッキー州のフォート・ノックス、米空軍のゴドマン基地において、トマス・F・マンテルといふ大尉が、円盤を追ひかけて行つて、命を落としたといふ事件を斥すのである。

その日の午後二時半ごろ、フォート・ノックスのMPは、国家警察の通達によつて、異様な巨きな物体がゴドマンの方へ飛んで行くのを知つた。警察は、ゴドマンから百五十キロ隔たるインディアナ州のマディソンで、この物体を認めてをり、マディソンの数百の市民もこれを目撃してゐた。

MPの連絡を受けたゴドマン基地の士官たちは、三時すこし前のこと、時折青空がわづかにのぞかれる曇天の基地上空を監視してゐた。突如、南の雲の切れ目に、一見金属性の巨大な物体があらはれ、一瞬太陽にかがやいたかと思ふと、すぐに消えた。忽ち命令が発せられ、マンテル大尉を長とする三機の追撃機が基地を飛び立つた。

司令塔の士官たちの全部がそれを見てゐた。それは巨大な

円盤の形をし、上部は円錐をさかさまにしたやうで、その頂点に、明滅する赤い斑点が認められた。

三時八分に、マンテルの僚機二機は、正しく目近にそれを認めながら、それにまかれてしまったこと、なほ追跡をつづけてゐるらしい隊長機を雲の裡に見失つてしまったこと、を司令塔ヘラチオで連絡してきた。

五分ほど経つて、マンテルの声が司令塔の拡声器に流れた。

「例の物体は上昇します。速度を増し、私の機と同じ速力で進んでゐます。時速三六〇マイルです。私は七千メートルまで上昇します。それでもなほ、あれを捕捉できなければ、追跡を断念します。」

しかしこれが生けるマンテル大尉の最後の声になつた。その後数分のうちに大尉機F51は空中分解を起したらしく、その残骸は数キロ四方にちらばつてゐるのが発見されたのである。

——これは多数の専門家を含む証人を従へた事件で、資料は精密であり、想像力の働らく余地は厳密に排除されてゐた。重一郎はこの本を読むうちに、円盤の搭乗者は他の遊星の住人であることを疑はないやうになつた。

「美しい星」本文では参照書名を「ロンドンで出版された『円盤の故郷』』としているが、明かにフランスで出版されたA・ミシエルの『空飛ぶ円盤は実在する』からの引用である（「円盤の故郷」という書籍の由来についてはすでに磯部剛喜が「重一郎が感化された『円盤の故郷』』という文献は存在していない」と指摘している⁽²⁷⁾）。書名等の変更は国内の引用元文献の翻訳者等への憚りがあつたためであろうか。

三島が参照していると思われる個所には傍線を引いた。また、特に酷似している部分は波線で強調した。事実を改変しないようにするための意図からか、円盤出現時の天候の様子や、円盤の形態の表現が似通つている。特にマンテルの発言部分はA・ミシエルの訳文をほぼそのまま書き写している。

(b) 羽黒らが目撃した円盤について

【A・ミシエルの表現⁽²⁸⁾】

一九四七年六月二十一日、ケンネッス・アーノルドは自分の飛行機を縦縦して、ただひとりワシントン州の上空をとんでいた。合衆国の北西隅、ちょうどチーハリスとヤキマの二地方のあいだであつた。

太陽がかがやき、飛行機から三十キロばかりのところ、レーニヤ山の雪が青空のしたに光つていた。アーノルドは何気なく前方を見た。が、そのとき、とつぜん、眼もくらむような光が彼の顔をそむけさせた。

雪の白さからくつきり浮かびだして、九個の輝かしい円盤が飛んで行くのを、彼はみとめた。その速力は山を軸とした速度と山との概算の距離から彼がはかつたところによると、時速二千キロ以上だつた。三分間のあいだ、このアメリカ人は胆をつぶしながら、九個の輝かしい円盤が、後日彼の語るところによると、「四千メートルの高度で互いにつなぎあわされているやうな」隊形をつくつて、山の頂きのまわりを飛翔するのを見ていた。

彼は山との概算の距離を考慮にいれて、その円盤の大きさを

D・C・3号くらいの大きさと判断した。

その形は、彼がヤキマについてから語ったところによると、フライパンか、またはコーヒー茶碗の受皿のようで、銀色の金属ででき、それが太陽にかがやいていたという。

【「美しい星」の表現⁽²⁹⁾】

そのとき床屋が頓狂な声を出した。

「円盤や……円盤や……かうつと、円盤や泉ヶ岳の雪の屑」

「何を言ってるんだ」

と羽黒が腹立たしげに言った。

答を待たずに 羽黒も、栗田も、今まで曾根が見るとも見ないともつかぬ無意識の視覚のうちに、凡庸な詩心に身を漂はせて、まだ少しもその実在におどろかさされることなしに、しかしこれ以上はないほどはつきりと、前方に認めてみたものを見たのである。

泉ヶ岳の雪に輝やく山巔さんてんの右方に、ふしぎな円い銀いろのものが浮んでゐた。一寸見ると静止してゐるやうだから、曾根の拙い俳句の云ふやうに、雪の屑が青空に飛散して、そこに止まつてゐるとも見える。しかし仔細に見れば、同じ位置のまま、その銀盤がすばやく廻転してゐるのがわかつた。

円盤の色彩の表現が類似している。雪山と円盤を対比する表現が類似している。

③ A・ミシエルの円盤や宇宙人に対する態度

(a) G・アダムスキーについて

【A・ミシエルの表現⁽³⁰⁾】

註——私はここで真実性があり且つまじめな証言だけを取上げたが、他にも種々の報告がある。

第一にポーランド系のアメリカ人ジョージ・アダムスキーが『空飛ぶ円盤実見記』で語る、途方もない物語である。アダムスキーはこう語っている。「そうだ、一台の円盤が私の目の前に着陸した。金星人がひとりそこから出てきた。背が高く、ブロンドの髪をし、眼が青い。われわれは意心伝心で話をした。……この会見は一九五二年十一月二十日に行われた。それから二十三日後に、金星人が再会を約束したので、私はアリゾナの沙漠でふたたび彼に会った。彼は私に手紙を渡したが、それを私はまだ解読できずにいる（アダムスキーの書物にはその写しが載っているが、当然のことながら判読不可能だ）更にまた、私は彼の足跡をとった（書物に写しがある）」

この書物には、そのほかに、金星の円盤の極めて明確な写真がのっている。上にずんぐりした塔のついているガラス鐘のようなもので、窓もついている。

物語はこれにとどまらない。一九五三年十月にノーウィチのF・W・ポッター夫妻というイギリスのアマチュア天文学者の二人（夫の方はブリチッシ・アストロノミカル・アソシエーションの会員である）が、三分半にわたつて、望遠鏡である物体を観察し、後にそれを筆写して、天文学会へ送っている。それはアダムスキーの器械の正確な再生である。が、左右あべこべになっている。ポッター夫妻の望遠鏡は、すべての天文学上の器械がそう

であるように、映像を逆に示したが、ともかく、驚嘆すべき符号である。この観察はアダムスキーの途方もない話を裏書きするものであろうか。彼ら二人の天文学者の証言は、もし彼らが前にあのポーランド系アメリカ人の書物を読み、かつ親しい知り合^マである^マと断言しなかつたらもつと信憑性があつたであろう。

A・ミシエルはG・アダムスキに対して、その信憑性を疑っており、批判的であることがわかる。

④三島の言及の分析

三島は「社会料理三島亭⁽³¹⁾」においてA・ミシエルについて言及している。

私が「空飛ぶ円盤」に本格的な興味を持ち出したのは、フランスの新聞記者のエイメ・ミシエルといふ人の書いた「空飛ぶ円盤は実在する」(邦訳を読んでからで、この本を読んだ以上、円盤の実在は疑ひの余地がないやうに思はれた。ところが大岡昇平氏は、パリでこの本の原書を読んでから、「円盤なんてマユツバ物だ」と確信するにいたつたといふのだから、同じ本でこれだけ反対の影響を及ぼしたところを見ると、田辺貞之助氏の邦訳がよほどの名訳なのにちがひない。

三島がなぜA・ミシエルによつて「円盤の実在」を「疑ひの余地がない」とまで思うようになったのか。筆者には、三島の言う翻訳

の質の問題を検討することはできない。しかし、A・ミシエルの書籍を検討した結果、三島が円盤を確信した理由としてはA・ミシエルの円盤への態度も関係しているのではないかと考えた。前述の通り、訳者である田辺は「訳者のことば」においてA・ミシエルの執筆態度を「科学的」と称賛している。A・ミシエルは執筆にあつてドナルド・H・メンゼルの科学的検証を重視する態度に依拠して円盤の目撃証言を取捨選択している。この点が訳者や三島に「科学的」と評価されたのではないか。以下にA・ミシエルがメンゼルについて述べている箇所を引用する⁽³²⁾。

ドナルド・H・メンゼル教授はハーヴァード大学で天体物理学を教えており、空とぶ円盤^マについて一番新しい本を書いた人だが、その『空とぶ円盤』のなかで、彼はこの問題に関する証言の価値を決定すると思う五つの条件を出している。

- 一、証言は直接に採集せねばならない。「という話だ」ということは嚴重にさければならない。
- 二、証言は全然変形することなく報告されなければならない。
- 三、証言は訓練された観察によるほうが、そうでない場合よりも、ずっと重みがある。
- 四、事実はこのを裏書きする第二の証人によつて確実化されなければならない。
- 五、匿名の証言は問題にすべきではない。

メンゼルの五つの条件のうち、三と四が「美しい星」に与えている影響は大きいと思われる。まず、条件の三について述べる。「訓練

された観察」ができる人物についてA・ミシエルはこの後の文章で「操縦士や士官やM・Pや国家警察の警察官」と述べている。つまり、円盤の観察報告において軍隊や警察の航空観測や事故報告の水準の正確さを求めていることになる。三島が「美しい星」で円盤の挙動を水平線からの角度などを用いて厳密に表現しているのは、このためだと考えられる。また、条件の四により、複数名で円盤を目撃したことのない大杉重一郎が、常に自らが宇宙人であるという自覚に確信が持てない人物として設定されている理由が明瞭になる。この「メンゼルの条件四」は、逆に暁子が竹宮と共に円盤を目撃して確信を抱いたことへの重一郎の「動揺」(第四章)の原因にもなっている。また、羽黒らが三人で円盤を目撃し、自分たちを宇宙人として「確信」「連帯感」(第五章)を持たせる理由にもなっている。

⑤聖書における表現と円盤の類似性の指摘

A・ミシエルは円盤現象と聖書における空の異常現象の表現との類似性を指摘している。

【A・ミシエルの聖書への言及①⁽³⁴⁾】

更に遠くさかのぼって、聖書にいたり、予言者エゼキエルが空中に見たという、あの有名な車輪を探究すべきだろうか。この大胆な試みは不必要である。以上のすべての記述はあまりにも象徴的であり、あるいはあまりにも太古のことに属する。

【A・ミシエルの聖書への言及②⁽³⁵⁾】

いやしくも健康な精神をもち、天文学上の現実に通じていな

ら、「四十八時間のあいだ天心に輝いていたものがあつた」といわれたとき、「それは星だろう」と答える男がいるとは考えられないからだ。世界ができて以来、天体が空中での昼間の運動にしたがうことをやめたのは、一回しかない。それは偉大な奇蹟であつた。その天体は太陽、幻術者はヨシユアと呼ばれた。そのことがあつてから何千年の歳月がたつてはいるが、いまだに人の口に語られている。それなのに、織女星をサハラ空に四十八時間とどまらせた第二のヨシユアの名を、どうしてたちまち忘れてよいものだろうか。だが、残念ながら、歴史はその名をとどめず、私は未来の幾時代にわたつて示すためにその名を残すことができない。

旧約聖書における「エゼキエル書」や「ヨシユア記」などでは空の異常現象は、神意の表れとされている。円盤を聖書の表現と重ねる発想は、欧米の文脈では特異なものではないようだ。

(2) T・ベサラム著『空飛ぶ円盤と宇宙』について

著者はアメリカ人。ラスヴェガス近郊のハイウェイ道路舗装工事に携わつていた際に、空飛ぶ円盤を目撃し、それに乗った「クラリオン人」と会見したと述べる。T・ベサラムがクラリオン人の宗教について尋ねるとクラリオン人の女性機長は「わたしたちは、すべてを見給い、すべてを知り給い、すべてをしろしめし給う最高神を礼拝するのです⁽³⁵⁾」と答えている。また、この女性機長はT・ベサラムの妻に手紙を送り「私たちも地球ではキリスト教を信じます⁽³⁶⁾」と述べている。T・ベサラムにおいては宇宙人とキリスト教を結び付

ける傾向が顕著である。最終章にはT・ベサラムがG・アダムスキと会見した様子が記述されている。

四、G・アダムスキの宇宙人と神智学との関係について

『美しい星』創作ノート(三冊目)には、以下に見るように「C」という記述が見られる⁽³⁷⁾。

「空飛ぶ円盤が何故動くか」

○マイナス引力を使ふのが動力。

○円盤の飛び方が一つ——稲妻型に飛ぶ、室内へ案内さる、計器なし、坐り心地のいい椅子、壁のみ、テレパシー——思念で行く。

○日本人係り20人

○夜釣

○海へ入る海の塩に還元され 再組織され、故郷へかへる。

○5、60機来るCの時。

また、詳細は不明ながら、「決定版全集」の「解題」には同じ創作ノートに「宇宙哲学」という記述があったことが記載されている⁽³⁸⁾。

三(縦二五×一七・八センチ)

表紙に「仙台ノオト 『美しい星』 三島由紀夫」と表記。

内容の概要は次のようである。《車中、「はつかり」90発列

車の旅。(中略)憲法改正、総理公選、自衛組織確立、ナシヨナリズム、宇宙哲学など。

「C」及び「宇宙哲学」とは、どんな意味を持つ用語なのか、またその意味が「美しい星」を読解していくうえでどのような役割を持つのか、読み解いていく。まず、これまでも何度か登場したG・アダムスキについて述べる。

G・アダムスキの経歴は、吉永進一の「円盤に乗ったメシア——コンタクティたちのオカルト史⁽³⁹⁾」に詳述されている。以下に、吉永によるG・アダムスキの解説をまとめる。G・アダムスキは一八九一年ポーランドに生まれた。その後アメリカに移住し、陸軍に入隊してメキシコ戦争に従軍している。その後「メタフィジクス」の教師になり「王立チベット教団」という団体を組織する。「メタフィジクス」または「メタフィジカル」とは、吉永によれば「アメリカ西海岸ではオカルト全般をさす包括的な意味で使われていて、より狭い意味では、ニューソートに神智学やスピリチュアリズムを含んだ概念として用いられている」とのことである。北村小松がG・アダムスキを「哲学の先生」と誤解しているのも、この用語の意味の揺れによるものだろう。王立チベット教団でG・アダムスキは神智学、ニューソート、スピリチュアリズム、そして天文学を混合した「普遍法則」を教え、『極東のマスターたちの知恵』『精神感応』などといった書籍を出版し、通信教育なども行っていたようである。一九五二年に金星人と対面したと述べ、マスコミに大々的に取り上げられた。これ以降、「宇宙哲学」の教師活動に専念することになるが、後年この「宇宙哲学」は王立チベット教団の教義で

あつたことが暴露されている。

このように、G・アダムスキーはかなり不審な人物であり、その発言には信憑性がない。にもかかわらず、宇宙人に面会したという体験の公表は大きな社会的影響力があり、これ以降宇宙人に面会したと述べる円盤運動家が多数出現するようになった。現在我々も円盤と言えば「アダムスキー型円盤」の形状を思い浮かべる。円盤運動家の代名詞と言うべき人物である。こうしたG・アダムスキーの「成功」の陰には、「神智学」の影響が見逃せない。

「神智学」について、吉永進一や大田俊寛らの論に依拠しながらその概要をまとめる。「神智学」について吉永進一は「スピリチュアリズムの流行から派生した運動⁽⁴⁰⁾」であるとする。神智学協会はロシア生まれのH・Pブラヴァツキーとアメリカ人H・Sオルコットにより一八七五年にアメリカで創始された。H・Pブラヴァツキーが思想面のカリスマであり、H・Sオルコットが実務的な面を担った。当時のスピリチュアリズムが死者の霊の働きで心霊現象が起きるとしていたのに対し、神智学は科学的法則を応用することで超常現象が起これるとし、古代からの普遍的な「知恵」の存在を認め、カバラ・錬金術・占星術などのさまざまな神秘主義思想を一つのシステムにまとめるところに特徴があつた。アントワヌ・ルフェーブルは『エゾテリスム思想——西洋隠秘学の系譜』において「ブラヴァツキー夫人とその協会はつねに、全宗教がそのエゾテリックな根底において単一であることを示そうとしてきた⁽⁴¹⁾」と述べ、その混淆^{シクレティズム}宗教的な傾向を指摘している。また、「オカルティズム」という用語を世界的に広く知らしめたのも神智学である。

一八七八年にはインドに拠点を移し、H・Pブラヴァツキーはチ

ベットに住むモリヤ、クートフーミなどといったマハトマ（マスター）から教えを受けたと主張するようになる。また、このころH・Pブラヴァツキーの周辺で起きた超常現象について書かれた書物が国際的なベストセラーになった。H・Pブラヴァツキーの思想は、人類は霊的な進化の途上にあるというもので、こうした思想はチベットのマハトマ（マスター）から物体出現などによつて送られてくる手紙によつて教示されたとした。後に「心霊研究会」の調査によつてこれらの超常現象が「詐術」とされたが、彼女の思想はその後のニューエイジ思想などに大きな影響を与えることになった。H・Pブラヴァツキーの死後、神智学協会は分裂する。後継者たちにはH・Pブラヴァツキーの思想の根拠にかけられた疑義を晴らす必要性があつたため、後継者の一人であるC・リードピーターはチベットにいるマハトマ（マスター）という存在を拡大し、「昇天したマスター（アセント・マスター）」という概念を生み出す。C・リードピーターは瞑想やヨーガによつて人間の秘められた「透視力」が開発可能であるとし、これによつて「遙かな遠隔地の視認、人間や物体を覆うオーラの感知、死者や自然霊との交信、さらには『アカシック・レコード』と呼ばれる霊的な記憶の場にアクセスすることによる、過去や未来の看取⁽⁴²⁾」が可能になるとした。そしてこの能力の開発のために、高位の霊的な存在である「大聖同胞団」に属する「昇天したマスター」からの教示が必要であるとした。この「昇天したマスター」には位階が存在するとする。太田俊寛はC・リードピーターの説をまとめて以下のように述べる⁽⁴³⁾。

最高位の第九階級を占めているのは、「サナート・クマール（永

遠の童子」という霊格である。神智学の教義によれば、彼は人類が第三根幹人種レムリア人として存在していた時期に金星から地球に到来し、「世界君主」の地位に就いた。彼は地球の大師たちの頂点に位置しており、その本拠地は、チベットの伝説の王国に因んで「シャンバラ」と称される。

一九三〇年以降は神智学協会自体の活動は低迷するようになる⁽⁴⁴⁾。一方で、協会から独立したさまざまなメタフィジカル教師たちが「群小グル」として活躍しだすようになる。吉永は、G・アダムスキもこうした群小グルの一人だとする。

G・アダムスキが円盤運動以前に営んでいた団体が「王立チベットの教団」であり、会見したとする宇宙人が「金星人」であるのは、神智学の影響であると考えてよいだろう。

また、G・アダムスキは自身の会見した金星人が「譬えようもなく美しかった」と述べている。G・アダムスキはこの金星人と「精神感応作用」によってコミュニケーションをとる。この「精神感応」は神智学徒C・リードピーターの「交信」と同様のものであろう。「創作ノート」における「テレパシー」「宇宙哲学」という用語はG・アダムスキからの影響の可能性がある。重一郎が円盤や「宇宙人との交信」(第一章)を行うのも、G・アダムスキからの影響の可能性がある。三島が「美しい星」において大杉暁子とその恋人竹宮を美しい金星人であるとしているのも、G・アダムスキが金星人を「譬えようもなく美しかった」としているからではないか。また、G・アダムスキは金星人の地球訪問の理由を「地球から発生している放射線」の調査であるとしている⁽⁴⁵⁾。

私はそんな爆発は危険ではないかと尋ねた。少しうがち過ぎた質問ではあったが、心の中であの悲惨な日本の原子爆弾の報道を心に描きながら、そう聞かすにはおれなかった。

これに対して彼は明確に肯定した。しかし彼の顔には、憤りや当惑の影は見られなかった。むしろ、すべてを理解し、寛大な憐みさえたたえて見えた。それは愛する子供に向って、その無智と無理解をさとす親の態度に似ていた。

人類の核兵器使用に対応する宇宙人という考え方は、「美しい星」の設定と類似している。以上から、「美しい星」にはG・アダムスキの影響があると仮説を立てることができる。この仮説を検証していくために、ついで、日本の円盤運動団体である「宇宙友好協会・CBA (Cosmic Brotherhood Association)」について述べる。

五、CBAについて

稲生平太郎は『定本 何かを空を飛んでいる』⁽⁴⁶⁾において、「美しい星」とCBAおよびアダムスキの関連について次のように述べている⁽⁴⁷⁾。

現在では有象無象あるUFOカルトの元祖といえ、前にも言及したジョージ・アダムスキーである。なお、彼が撮影したと称する円盤写真は現在の視覚的円盤像の原型を創造したといつても過言ではなく、アダムスキー型円盤といえ、ああ、

あれかてなもんである。その意味では彼は二十世紀ポップ・カルチャーの隠れた大偉人であつて顕彰されてしかるべき人物であらう。

さてポーランドからアメリカにやつてきた移民であるアダムスキーは、大不況時代に南カリフォルニアに落ち着いて、神智学をまねたような東洋的色彩の濃いオカルティズムで食つていたらしい。第二次世界大戦末期頃には、彼は有名なパロマ天文台の近くに居を定め、一九四六年には『宇宙の先駆者』と題するSF小説を出版している。戦後ハンバーガー屋で働きながら細々と暮らしていたアダムスキーが、一躍世界中の脚光を浴びることになったのは、一九五三年に『空飛ぶ円盤着陸せり』を発表したことによる。この著書において、彼は一九四六年（アールノルドの目撃の一年前）から円盤を多数目撃、そればかりか、一九五二年には、円盤から降りてきた異星人と「会見」を果たしたと主張した。アダムスキーによれば、この異星人とは金星人で、霊的、科学的に高度な文明を誇る彼らは、太古から地球を監視、現在のよう核兵器の使用は地球の破滅を招くと強く警告したという。

この著書、そして続編『宇宙船の内部で』（一九五五）は世界的ベスト・セラーとなり、これを契機に、宇宙人と会見したり、宇宙人に金星や火星にや月に連れていつてもらつたと主張する人々（被接触者と呼ばれる）がどつと名乗りを上げだした。どれもアダムスキーと同工異曲だけれど、とりあえず有名なのを挙げておくと、トルーマン・ベシューラム（『空飛ぶ円盤に乗って』「一九五四」）やダニエル・フライ（『ホワイト・サン

ズ事件』「一九五四」）なんかがいる。ちなみに、この時期の宇宙人たちは、金星や火星にも生物がいるんじゃないかと思われていた頃だから、全員、太陽系の惑星から飛来してきます。

こうして、熱狂的なコンタクトイ・ブームが始まり、彼らの周囲に集まつた人々はカルトを形成し、UFOカルトの第一次黄金時代が現出したのである。外来文明の受容の素早さには定評のある我が国にも昭和三十年代前半にこのブームは波及、イギリスのコンタクトイ、ジョージ・キングの創設したカルトの日本支部があつたという間にできているし、「宇宙友好協会（CBA）」という世界に誇るべき（？）カルトも形成された。CBAはその行動性、熱狂性で群を抜いており、地軸がもうすぐ傾いて世界は破滅、異星人の宇宙船に乗っけてもらつて助かるんだという「教義」のゆえに、非喜劇を展開することとなった。なお、三島由紀夫の怪作『美しい星』はCBAのことを知らないと理解できない部分が多いので要注意。そうそう、CBAといえば、僕には個人的な思い出がある。僕が七〇年代の円盤ムーブメントに足を突っ込んだこと話したよね。で、その頃、CBAなんて幻の団体とかとつくの昔に潰れていると最初思つてたんだけど、ところがどっこい、円盤の裏の世界で依然として精力的な活動を続けているのを目撃して、驚いてしまった。このへん、ほんまにやばいような気もするので、詳しく語るのはやめにしよう。

また、稻生は同書巻末の「附録 泥の海——あるいは円盤文献瞥見」において、参考資料とともに「美しい星」およびCBAに関

する記述を行っている⁽⁴⁸⁾。

⑮平野威馬雄編

『それでも円盤は飛ぶ!』(高文社、1960年)

平野威馬雄には円盤関係の著作、翻訳がかなりあるが、この本はCBAなど日本の1950年代円盤運動の熱気を伝える資料として貴重な一冊。アダムスキーを初めとするコンタクテイたちが当時の一部インテリ層に与えた衝撃は、こういうものがないと今や理解できないだろう。三島の『美しい星』の副読本ともなりうる。(中略)CBAの活動については、雑誌『地球ロマン』復刊第2号を参照せよ。

稲生が指摘する雑誌『地球ロマン』復刊第2号⁽⁴⁹⁾には、堂本正樹・団精二・中園典明による「座談会 日本円盤運動の光と影」が掲載されている⁽⁵⁰⁾。

中園 その点、CBAというのは立派だ。六一年六月に松村のヘゲモニーが確立してからは、アダムスキーをきっぱりと否定する。アダムスキーは人類を真理や愛の言葉で眠らせ、正義と実践を分離させる悪しきオリオンの手先で、CIAなんかとつるんで、ニセのコンタクト・ストーリーをデッチ上げ、宇宙人飛来の目的を歪曲し、人類の眼を覚めさせぬ様にとめているというわけです。つまり宇宙人は、愛にみちたお説教をした、宇宙旅行に招待するためにやってきたのではなく、原水爆と地軸傾斜の危機に直面する地球人類と遊星の進化の援助に

来たのであり、真に円盤、宇宙人問題を理解するならば、愛を説き、真理を叫ぶよりも主義を実践すべきだというわけです。

(中略)

堂本 三島由紀夫もJFSAのメンバーだったでしょう。

団 彼の『美しい星』、あれは、もし円盤文学というジャンルがあるとすれば、最高傑作でしょう。

堂本 あの作品はCBAをモデルにしているようだね。もちろん、モデル小説じゃないから完全にパラレルになってるわけじゃないけど、まず主人公の大杉重一郎が組織する団体の名前が宇宙友好協会ならぬ、宇宙友朋会だからね。大杉一家と対立するのが、白鳥座六一番星から来た、羽黒一作⁽⁵¹⁾の悪い宇宙人。これが三人になっているのは明らかにグレイ・パーカー『黒衣の三人の男』、いわゆるブラックメンからのヒント。白鳥座六一番星は宇宙連合に敵対するオリオンとパラレルだ。

中園 CBAと大きく違うところは、松村雄亮は、宇宙人の生まれ変わりだとか、宇宙人の心霊がのり移ったという主張はしなかった……。しかし、これもボード事件で除名された渡辺大起や小川定時なんかは、自分達は、塵捨てのような墮落した遊星におもむき、その遊星と同胞に援助の手を差し延べる⁽⁵²⁾。清掃人夫⁽⁵³⁾と呼ばれる宇宙人の集団だと言ってたわけでそんなモデルにしたようにも思える……。それにしてもひどいのは当時の円盤界の事情を全く知らない三島文学のクソ評論家が、トンチンカンなことばかり言っている点だ。新潮文庫版の解説を書いている奥野健男なんていうのはその筆頭で、主人公の大

杉重一郎が火星人で、娘の暁子が金星人なのはいいとしても、妻と息子が、人間はおろかどんな生物も棲めない木星、水星を故郷にしているのは、三島が、円盤とか宇宙人とかいかにもSF的な素材を提出するに当り、SFじゃないということも明らかにするために、わざとそういう設定にしたんだろうと述べている。ところが、三島が『新潮』に連載を始めたのが六二年の一月だが、前の年の八月にCBAが呼んだ、G・H・ウイリアムスンなど、水星はおろか太陽にも人が棲んでると言うんですよ。アダムスキーも土星人に会ってるし、……コンタクト派の間では、太陽系のあらゆる惑星に人が住んでいるのは常識だ。三島はそういう円盤界の現状を踏まえて書いているわけだね……、

三島と同時代の円盤運動家たちにとつては、「美しい星」と「CBA(宇宙友好協会)」の関係は自明のものであったようだ。吉永進一の論⁽⁵¹⁾に拠りながら、CBAについて、概要を説明する。

CBAは一九五七年に松村雄亮という人物が中心となって結成した団体で、初期メンバーには久保田八郎(後にG・アダムスキーの著作を多く翻訳した)、小川定時(「生長の家」編集者)、橋本健(超科学者)らがいた。松村はもともと航空業界のジャーナリストであり、海外の円盤情報に詳しくかった。一九五九年に『地軸は傾く!——宇宙人からの地球人への指針』という書籍を翻訳した。以下に吉永の説明を引用する⁽⁵²⁾。

この本によつて、大災害(catastrophe)の頭文字をよつてつと呼ば

れた)の原因は地軸の傾きで、日時は一九六〇年(昭和三十五年)頃だろうということが会の中では通説となつていった。こうした情報は会員総会や地方会員には極秘文書で伝わっていたようである。五九年(昭和三十四年)暮れに徳永光男の出した「トクナガ文書」は、六〇年か六二年に地軸が傾いてCが起ること、それまでにサバイバル用品を準備すること、Cの十日前に電報を流すので、選ばれた者は円盤に乗つてほかの惑星に行き、そこで三年間の再教育を受けた後、地球に戻つて新しい黄金時代を作ることなどを会員に伝えている。

翌年一月には平野威馬雄が情報源となつて「産経新聞」に情報が漏れだす。(中略)外部からの批判も高まり、一九六〇年(昭和三十五年三月)、松村はいったん代表を降り、アダムスキー派の久保田八郎が会長に就任する。(中略)久保田は一時的にCBAの代表となつたが、十月には早くも小川定時に取つて代わられ、翌年にはCBAを追われて、別個にアダムスキー主義^{ママ}団体、日本GAPを設立し、生涯アダムスキー主義の宣伝に挺身することになる。(中略)一九六一年(昭和三十六年)八月、CBAは『宇宙語・宇宙人』出版記念と題して、ジョージ・ハント・ウイリアムスン講演会を東京・有楽町の朝日講堂で開催している。このとき、日本空飛ぶ円盤研究会との間にトラブルが発生し、研究会側はウイリアムスンの自称「博士」号を含め、いくつかの公開質問をCBAに送りつけている。(中略)一九六三年(昭和三十八年)には熊本県山鹿村のチプサン古墳に、古代太陽王国の宇宙文明遺跡を顕彰するアーチと掲示板を取り

付け、同市教育委員会から撤去を求められるという問題を起こしている。また、同年暮れ、北海道平取にハヨビラの太陽ピラミッド建設を発表、翌六四年（昭和三十九年）に敷地を買収すると、会員を動員して建設を開始する。（中略）ハヨビラ・ピラミッド建設後、CBAは急速にその勢いを失う。一九六七年（昭和四十二年）六月にピラミッド完成を祝うセレモニーが最後の火花となり、その後の活動は急速に勢いが衰えている。

我々が注目すべきは、CBAのこれらの活動が一九六二年（昭和三十七年）の「美しい星」執筆時期と重なっている点である（別紙年表を参照）。

「創作ノート」の最後の箇所の「Cの時」とは、CBAの主張していた大災害 (catastrophic) の「C」と見ていいだろう。三島が当初の構想においては作品中に大量の円盤が到来する「Cの時」を描こうとしていたこと、そしてしかしその描写を省いたことは、作品の読解を考えるうえで重要になってくる問題だと思われる。堂本正樹が指摘しているように、「美しい星」はCBAの活動をモデルにした可能性がある。その実態を解明し、作品との異同を検証することが読解の上では必須になってくる。

しかし、まず三島がどういう経路でCBAと、その用語である「C」を知ることができたのか検証しておきたい。

六、平野威馬雄とCBA

平野威馬雄は一九〇〇年東京生まれの詩人・フランス文学者。

料理愛好家平野レミの父。平野はG・アダムスキラの『空飛ぶ円盤実見記』を読んだことを動機として『それでも円盤は飛ぶ！——日本における空飛ぶ円盤』（以後『それでも円盤は飛ぶ！』と表記）を執筆したとする。また、平野が北村小松と面会した内容も書かれている。本書にはこれまでに確認した円盤運動の用語が頻出する。冒頭に「JFSA」の「UFO観測会」に参加する三島の写真が掲載されている。「CBA」の「会員総会」のレポートなど、当時のCBAの活動の様子がうかがえる資料や証言が数多く掲載されている。「美しい星」との関わりにおける確からしきの順位は低い文献だが、無視しえない内容が多くあるため、以下に列挙していく。

(1) 平野は「まえがき」での謝辞で以下のように述べている。JFSA、CBA、北村小松ら、円盤運動に関わる人々との広い交流関係がうかがえる⁽⁵⁾。

大阪豊中市のMSFAの主催者高梨純一氏（近代宇宙旅行協会）や、東京五反田の荒井欣一氏（日本空飛ぶ円盤研究会の代表者）や、コンタクト・クレイムやスペースマンの存在を主張し、CBAというUFO研究グループをもっておられる横浜の松村雄亮氏、さては、古くからUFOに異常な関心をもって、多くの資料をあつめ新しい「見解」をもっておられる北村小松氏、綜合科学会の仁宮武夫氏その他多くの研究者のみなさんから、たくさん資料や教示を受け、さらに以上の諸先輩の出しておられる機関紙からそれぞれ、あたたかい御好意と御許しをえて、重要な記事を抄録させていただいた。

(2) G・アダムスキの著作の引用をし、G・アダムスキが宇宙人と「得意の精神感応」⁽⁵³⁾によって交流したこと、宇宙人は「金星からやってきた金星人」であること、「太陽系の各遊星にはみな地球と同じような人類が住んでいて、かれらは宇宙機で自由に宇宙旅行をしてお互いに仲良く交際」していることなどを記述している。また、宇宙人が地球来訪をする目的は「原水爆実験」にあるとする⁽⁵⁴⁾。

最近地球では原水爆が発明されて、その実験をひんぴんとしておこなうために、核ばくはつから生じる放射能が、地球の大气を汚染するばかりか、宇宙空間や他遊星にまでも影響を及ぼし、きわめて危険なので、その調査にやってきたのだと、地球来訪の目的をのべており、地球人はまだお互い同志で戦争をするような野蛮で危険な人類だから、他の遊星人は積極的に地球人と交渉を持たないのだと金星人は語っている。

「美しい星」でも、重一郎は「精神感応」によって円盤との交信を試みている。

(3) A・ミシエルの著作について触れ⁽⁵⁵⁾、「アダムスキやベサラムたちに対しては、過度なほど厳格な態度で臨んでいる『日本空飛ぶ円盤研究会』でも、このミシエルの著書にだけは、一目おいて、その価値を認めている。」と好意的に評価している。

(4) 「宇宙友好協会(CBA)」の主催者松村雄亮について紹介している⁽⁵⁶⁾。松村は当時インタラピア航空通信日本通信員であったが、円盤を既定の事実として認めており、宇宙人も「言葉でなくテ

レパシイ(精神感応)」で宇宙人と交信できるか実験をしていると述べている。

(5) 第三章にあたる「地球の崩壊を唱える人々」では、CBAの活動が大きく取り上げられている。平野はCBA主催者の松村雄亮から招待を受け一九五九年八月二二日に東京駅地下「丸の内レストラン東京」で行われた「会員総会」に参加する。平野は「CBAは超現実的でありスリルに富み、こうしてはられないという緊迫感を与えてくれたのである。ここでは一切の批判や判断は賢明な読者におまかせして、ありのままを描くにとどめる。数多くある日本の円盤研究グループの中にあつて、断然『比類なき確信と勇氣』にあふれたこの特殊な一グループのあり方を記すことは、あながち無駄ではないと思う。」と述べている。

総会の内容で特筆すべきこととしては、当時のCBAの翻訳新刊書『地軸は傾く』(レイ・スタンフォード著)の紹介がある。この本の内容は「地軸傾斜による大変動」がくるという終末観を伴った予言を宇宙人から受けたとするものである。「地軸傾斜による大変動」はCBAでは「C」という略称で呼ばれている。これに合わせて、宇宙人からのメッセージがCBAに寄せられていることが会の司会者から述べられる。会の様子について、平野の報告を以下に引用する⁽⁵⁷⁾。

司会者、主催者側らしい若い青年たちのメインテーブルの真向うにぼくは座を占め、一言半句もききのがすまいと身構えた。すると色の白い眼の澄んだ二七、八歳位のほっそりした背広の青年が、静かに開会を宣した。そして「今日はおそらく、重大な情報をお聞かせすることになると思います……」という

意味のことをいった。そして順序として、全会衆に各自二分間ずつ、「円盤についての正直な見解」を告白してくれと要求した。四五〇人の人々は従順にその通りした。あとでわかったのだが、ヒヤカシ半分の不真面目な分子がまじっているかどうかを、所謂重大な秘密情報発表のためのサグリとして、「告白」を要請したものらしい。

(中略)

ひとわたり見解の発表がすむと、そのとたん、ワーツ！と、場内の静寂を破って、腸を断つような号泣が起った。場内は一瞬、しーんとした。会衆はぼかんとして、何が何だかわからぬ……といった表情だった。ぼくはあまり突然のことなので狐につままれた感じだった。身をもだえ、顔をおおい、さめざめと泣きじやくつているのは今まで玲瓏な感じをもちつづけていた美貌の青年司会者だった。歎歎と嗚咽は三、四分間つづいた。主催者側の紳士たちは「いかに、むりはない……泣きたいだけ泣きなさい……」

と、心から、いたわるような表情で、いずれも、うつむいたままであった。「なにかあるぞ！ なにか、たしかに重大なヒミツがあるぞ！」と、ぼくは身のひきしまる思いだった。すでに会場のそこから、ひそひそと、ささやきかわす声がはじまった。一同、「どうしたのでしょうか？」「ヒステリーみたいだ」「一寸した演出じゃないのかな」というような、ささやきもあつた。

やがて、青年司会者はハンケチで涙をふいた。そして、やっと意識をとりもどしたかのようにふたたびもとの通りの、ここ

やかで、澄み切った表情にもどり、深く低頭し、「はしたないマネをいたしましたことを深くおわび申し上げます。ほんとに申しわけございませんでした」と、いんぎんにわびた。その態度は率直で非常に好感がもてた。

(中略)

やがて、先刻号泣した司会者は片手にその本を持ち、あたかも教会で牧師が聖書の講義をするときのような厳肅な態度で、明快に且つ深刻なイントネーションをまじえて、次のように語りだしたのである。

「この本の趣旨を要約しますと、宇宙船および宇宙人に関するおどろくべき新資料の提供であり、更らに重要なことは宇宙人の科学的観察と知性によつて判断されたとする、地球の地軸傾斜による大変動の警告と対策準備についての地球人への助言であります。宇宙のブラザーたちは、深い深い大きな愛情をもつて、呼びかけて下さつたのです。しかも、この宇宙の大変動につきまして、ここではつきりとその人……名ざしで申しあげるわけにはまいりませんが、すでに、われわれCBAの兄弟の中にも、親しく、ブラザーとコンタクトまでして、円盤にも案内された者がいます……そして、円盤内において、おごそかに、このC(われわれは、この大変動をCとよぶことにいたします)が、近き将来、いや、目の前に近づきつつあることを教えられ、その対策を、いろいろと暗示されているのであります。」

そろそろおそろしい話になってきた。円盤の存否問題を素通りして、高次の謎がパツとその金色の扉を左右に開いた……その奥にはさらに解き難い、無限大の虚空とガラクシイ(銀河)が

光っている！

(中略)

CBAの人々は、アダムスキの一言一句に深い尊敬と信仰を抱いているので、当然、アダムスキの流れをくむこのアメリカの青年コンタクティ(コンタクトする人)(及川註:『地軸は傾く』を書いたスタンフォードのこと)のアラームは何の反発もなく受けられている。しかもこの地軸変動にかんしては、すでにアダムスキがその『同乗記』の中でも、明言していることだ。すなわち……

「地球の聖書に記された或る記録についてあなたの関心を促したいと思います」と、金星人オーソンは円盤の中でアダムスキにむかつて云っている。「その文章を注意深く研究されますと、地球人の寿命は上空をおおっていた雲が減ってきて人間が初めて宇宙の星を見たときに短かくなり始めたという個所を発見されるのです。

(中略)

さて……CBAの司会者は、一応スタンフォードの『地軸は傾く』の内容を紹介し、さらに、今や切迫中の大変動に対処すべき心構えを説くのであった。

「新時代に貢献するためには現在どうしたらいいのか……またその時になつて何をすればいいのか……と申しますと、もちろん、これはその人個人の問題で、おそらく自分自身の役目は或る人にとつてははつきりしており、またある人にとつては現在のところまだ殆んど明白ではないかもしれません。しかし、もしもみなさんが自らの奉仕の準備をととのえ、しかも誠実に人

類への貢献を求めるならば、みなさんの疑問に対する解答は必ず明らかになるでしょう……そうです……宇宙のブラザーたちは、こうおっしゃいます。まず生命を賭して使命を遂行する覚悟と準備が自分にできたことを示さない。そうすれば、みなさんの任務は今すぐ開始されることでしょう……そうです。正にこれは真理です。」

会衆の心の中にはおそらく、理由は知らず、とまれ、この栄えある大機マシンに当面して、なにか地球人のために役に立つ仕事をしたい……という、ヒロイックな気もちがわいてきたことだろう。じつさい、ぼくも、思わず両の拳をにぎりしめて、それが恰かも聖なる高き知性の宇宙人からの託宣でもあるかのように、この眼の澄んだ若き司会者の言葉にきき入ったのである。

総会最中に号泣する司会者の様子から、CBAが単なる円盤の研究会ではなく、その構成員に或る種の精神的高揚を感じさせる宗教性のある団体であったことが類推される。平野も、司会者の言動を「あたかも教会で牧師が聖書の講義をするときのような厳粛な態度」と表現している。CBAはG・アダムスキに対し「深い尊敬と信仰」を持つ団体で、宇宙人は「聖なる高き知性」を持つものとされている。「金星人オーソン」は聖書を引用して地球人の関心を促そうとしている。宇宙人及び円盤を聖書との関連で宗教的な対象として崇める態度は、CBAにおいては特に顕著であったと考えてよいだろう。

「美しい星」では、主人公大杉重一郎の組織する「宇宙有朋会」

の会員が羽黒に對し送った手紙から、会および会員の心情が類推される描写がある⁽⁵⁸⁾。

彼はやうやう机に向つて、しかし答案には手をのばさずに、今朝届いた速達を読み返した。それは宇宙友朋会の会員の私信だった。羽黒たちがただ内偵の目的からその会員になつてゐるとは知らずに、いつも最新の情報を送つてくれる熱心な若い会員である。会報の発行は不規則なので、ニュースはこんな私信のほうが一ヶ月も早い。

「前略、遠隔地に居られる先生に、東京における本会の目ざましい発展を、一刻も早くおしらせしたい気持ちにかられて、これを書いてをります。

大杉重一郎会長の講演会は非常に盛況で、私も聴きに行つて、深い感銘を受けました。二三の雑誌にもとりあげられる模様で、本会の発展は、ここに新段階を劃した、と云つてもよいでせう。

大杉先生の講演要旨は、いづれ会報に記載されると思ひますが、人類の平和と、破滅に瀕してゐる地球の救済を謳つて、冷静な語調ながら、もし第三次大戦に人類が突入する場合の災禍を描くあたりは、息もつかせぬ迫力がありました。又、人類が眞の平和を確立して、宇宙の調和と一つになる至福を論じたあたりは、先生の白哲のお顔も紅潮して、聴衆はみな夢見心地になつて、すでに目の前にその至福が到来したことを実感してゐるやうな様子でした。

『空飛ぶ円盤』が平和の使者であり、友愛から出た警告者

であることを、先生ほどはつきり論証された人はゐないでせう。私たちはまづ勇気を学んで、人間を怖れず、世界を怖れず、宇宙を怖れないところに、まづ自己の平和を見出すべきなのです。宇宙を怖れ、世界を怖れ、人間を怖れる恐怖心と猜疑心が、すべての戦争の原因なのです。

大杉先生がスライドで見せて下さった円盤写真は、いづれも「憑性の高いもので、ブラジル海軍省公認の円盤写真などは、劃期的なものと云へます。南米のどこかの断崖のほとり、紺碧の南の海の上に、ぽかりと浮んだ白い淨らかな円盤の姿は、地上の雑事やいがみ合ひの世界から、私たちの心を、遠く天外へ拉し去つてくれました。……」

人類の危機に際し宇宙人が「深い深い大きな愛情」から「アライト」をもたらそうとしてくれているとCBAの会員が考へていることなどは、「宇宙有朋会」会員の心情と重なる部分がある。双方ともに、批判的思考力を働かせずに円盤・宇宙人を妄信している状態も似ている。

(6) 金星人を自称する人物の紹介と簡易なインタビューがJFS Aの機関誌「宇宙機」から抜粋されている。この人物は神奈川県葉山に住む酒井克己という音楽家で、前世に金星に住んでいたと称した⁽⁵⁹⁾。

問——ではあなたは どうして自分が金星人であることを知ったのか？

答——人は誰でも思いがけずフツと幼かった日の記憶を思い出

することがあるでしょう。それと同じことで私は或日突然前世の記憶が甦った。そして靈感によつて前世（今から約五〇年前）は金星に住んでいたことを思い出したのだ。それから引続いてそのまた前世はスピカ（乙女座）系の遊星の住人だったことも思い出すことができた。

（中略）

問——人間は代々他の天体に生れ変わるものだということはアダムスキも云つていようだが、それならばあなたばかりでなく誰でも前世は他の天体にいた事になるが。

答——然り。あなた方も誰でも皆そうなのだ。ただそれを思いたさないだけだ。夜、星空を見上げて特に心ひかれる星があつたら、それがその人の故郷の天体なのだ。地球上の故郷の山河を懐かしがる心理とまったくおなじだ。

続けて酒井は太陽系の各遊星には地球人と同様の人類が住んでおり、「太陽系連合」を形成していると述べる。また、「地球の平和統一」を目的にしているとも述べる。一九五七年の六月二四日から地球統帥の地位についていたが、十二月一日に当時のソ連共産党第一書記フルシチョフと交代したとする。さらに平和統一運動として「新しい時代を前にして」と題するパンフレットを世界各国の元首宛に送り、地球内で対立闘争するのを止めて他の遊星の人類と親密な関係を結ぶべきと勧告したとも述べる。この人物の言動は「美しい星」の登場人物たちの造形に影響を与えている可能性がある。

平野は自らの見聞した円盤運動家たちを「1 厳正派（JSFA）などの科学的に円盤について説明しようとする立場」「2 コンタクト

派乃至アダムスキ派」「3 心霊派」という三種類に分類する。CBAは「2 コンタクト派乃至アダムスキ派」に入るとする⁽⁶⁾。

この派の人々は、円盤は既定の事実ときめてかかり、その上に立つて宇宙人の実在を肯定し、その宇宙人との精神感応^{（テレパシー）}・通信、コンタクトなどをそのもつぱらの仕事としている人々である。これらの人々は、はじめはアダムスキやアリンガムの会見記に血湧き肉躍る思いでいるうち、ついに自ら宇宙人とコンタクトしようとして、或は宇宙交信機を用いたり、宇宙人と交流のためにトナエゴト（ベントラ、ベントラ……の如き）をしたりする。だから、一寸見ると、類似宗教の観がある。この派は目下Cの切迫にそなえ能動的実行運動に余念がない。CBAがこの派を代表している。

「類似宗教」とは、戦前の日本で公認されなかつた宗教団体を分類した名称である。しかし、ここでは新興宗教または円盤カルトになりつつあつたCBAの団体としての性格を評した表現であると考えてよいだろう。こうした宗教性の萌芽を宿した団体のありようは、「美しい星」の「宇宙有朋会」の性格に非常によく類似している。

(7) 『これが空飛ぶ円盤だ!』について
『これが空飛ぶ円盤だ!』は平野によつて編纂された二つ目の書籍である。しかし、書籍のほとんどの部分が欧米の円盤関係の資料からの引用であり、「美しい星」の読解に参考になる箇所はあまりない。聖書の表現を円盤とみなす箇所（「エゼキエル書」や「ヨハネ黙示録」が例示されている）や、G・アダムスキの宇宙人との会見を「嘘

偽」と断定する表現などが挙げられる⁽⁶¹⁾。

ジョージ・アダムスキのような話は、いまのところ確実に証明されておらず、それに類似した空飛ぶ円盤乗員との会見報告は、嘘偽であることが証明された。

七、まとめ

まず、A・ミシエルの『空飛ぶ円盤は実在する』と「美しい星」の関係についてまとめる。A・ミシエルの著作から三島はマンテル大尉事件などの描写を引用している。また、メンゼルの条件に従って、複数の人間による観察以外は信用するに当たらないという考え方を採用している。このため、複数名で円盤を観測したことの重一郎は自ら宇宙人であるという自覚に根拠を得ることができない人物として造形されている。また、聖書の引用があることで、欧米では円盤とキリスト教の関係性が連想されやすいものであることがわかる（これは、T・ベサラムの著作からも裏付けられる）。円盤・宇宙人という表象には、キリスト教的意味が含蓄されている場合があると結論付けることができる。これらの事柄は、三島がA・ミシエルについて言及しているため、確実な影響関係と考えることができる。既に磯部剛喜は以下のように「美しい星」とキリスト教の関連について指摘している⁽⁶²⁾。

われわれは物語の始まりからキリスト教的世界観に酷似したヴィジョンに遭遇する。空飛ぶ円盤の来訪を求めて夜空を仰

ぐ大杉家の姿は、科学的なUFO観測ではなく、聖母マリアの姿が天空に浮かび上がることを信じるファテマの少女たちを連想させるからだ。空飛ぶ円盤の飛来は、キリスト教的奇蹟と同質の啓示として描かれている。（中略）『美しい星』の随所に、聖書的な世界観の象徴が現われているのは、三島がコンタクトイたちの世界観がキリスト教に基づいたものにあることに気づいていたからであると見なしてよい。ここに三島の透徹した観察力を窺い知ることができる。

これまで「美しい星」と円盤運動の関りについて指摘されていた内容を、今回の論文では実証的に確認することができた。円盤運動とキリスト教との深い関わりから「美しい星」は、三島由紀夫によるキリスト教文学作品であると結論付けることができる。今後この作品はキリスト教との関連で読解されていく必要がある。

次に、平野威馬雄の『それでも円盤は飛ぶ！』について。影響関係の確からしさの順位は低くなるが、三島は平野の著作を「美しい星」執筆の参考にしていった可能性が高い。「宇宙哲学」や「C」の話題を創作ノートに書いていたことから、三島はG・アダムスキやCBAに関して少なくとも平野と同程度の情報は得ていたようである。以上を前提としたうえで、考えられる影響関係を挙げていく。

まず、G・アダムスキの影響について。主人公重一郎の娘暁子やその恋人竹宮が美貌の金星人であると設定されていることには、G・アダムスキの影響が考えられる。また、G・アダムスキが見した金星人が地球を訪問した理由は人類が核兵器を使用したためである。これは、大杉家の人々が人類を核兵器による滅亡から救済

することを目的としていることにつながっている。

次に、CBAの影響について。すでに堂本らに指摘されているように、「CBA（宇宙友好協会）」と作中の「宇宙有朋会」という名称が酷似している。平野の『それでも円盤は飛ぶ！』にはCBAの総会の様子が記録されている。CBAの司会者が批判的思考力を働かせずに円盤・宇宙人を妄信している様子は、「宇宙有朋会」の会員の心情と類似している。平野の書籍には前世宇宙人だったという人物についても報告されている。これは「美しい星」の「宇宙人だといふ意識に目ざめた」（第一章）大杉一家の造形に影響を与えていると可能性がある。「美しい星」に現れる重一郎の危機意識や「交信」などは、CBAを介してG・アダムスキの円盤に関わる見解が反映していると推測できる。このため、「美しい星」の登場人物はCBAやG・アダムスキを踏まえて創作されている可能性がある。

一方で、CBAやG・アダムスキに対して、三島の所属したJSFAの北村小松らは批判的な態度をとっている。三島はこうした二つの立場を総合して「美しい星」を作品化していると考えられる。このことが先行研究で言われてきた「語りの二重性⁽⁶³⁾」（地球人の視点からは宇宙人という主張は滑稽なものとして戯画化され、宇宙人という視点からは地球人が自らの開発した核兵器で滅亡するという愚かさが指摘される）を生む原因になっていると考えられる。

磯部剛喜は円盤運動と神智学の関係について以下のように述べている⁽⁶⁴⁾。

ジェローム・クラークの『UFO現象大百科事典』（一九九八）によれば、コンタクティたちの祖先が、エマヌエル・スウェーデ

ンボルグとヘレナ・ブラヴァツキーの二人の神秘家であると指摘されている。彼はコンタクティの体験を心霊主義的な邂逅経験だと見なしているわけだが、この考えは他の天体から空飛ぶ円盤に乗って来た人類と会見したという人々の主張を大方網羅していると言える。

以上、これまで本論文で確認した内容を総合して判断してみると、「美しい星」におけるキリスト教はエゾテリスムによる影響が濃い可能性がある。したがって、「美しい星」本文内や三島の他の作品において、他にもエゾテリスムの影響が見受けられるか、再検討していかなければならない。三島がキリスト教についてどう考えていたかという問題は、未解明な部分が多い。三島は小説家としてデビューする以前からキリスト教に関する創作を数多く書いている。今後、これらの創作物をも含めて検討して行く必要がある。そのうえで、三島の作品群の中の「美しい星」の位置づけを考えてみなければならぬ。また、もちろん「美しい星」をキリスト教文学としてより詳細に読み直し、その評価も改めて行うべきであろう。神学者小田垣雅也は「神の子イエスは十字架の上で神の子であることを否定され、しかしその否定を通してのみ、神の子はその否定の中に臨在する。無限なるものは、それに対する人間の理解や認識の否定を通過しなければ、人間が知りうるものとはならない」と述べ⁽⁶⁵⁾、「二回にわたる世界大戦を経験した二〇世紀前半は戦争の時代であり、やはり異常な時代であった。アウシュヴィッツやヒロシマに象徴される世界的規模での惨禍は、人類が初めて経験したものだ。だからそのことに対応した神学も、ある種の偏りを持つことは避けられない

い」とも述べている⁽⁶⁶⁾。私はこうした現代神学の課題意識は、「美しい星」のテーマと密接に関連してくると考えている。

三島がキリスト教や「神」についてどのように考えていたかを探ることは、当然晩年の天皇制への接近の課題を明らかにする手がかりにもなるだろう（ただし、私は三島の晩年の天皇制への傾倒はある種の短絡だと考えており、批判的に捉えている）。また、三島の宗教観を探ることは晩年の大作「豊饒の海」の解釈にも示唆を与えてくれるだろう。転生する登場人物と「宇宙人という前世」を持つ人物の近似など、この二つの作品には類似する部分が多い。こうした問題系列に今後多くの研究者が取り組んでくれることを望む。

注

1 「三島由紀夫『美しい星』論——物語類型における「聖書」との関連について」『言文』（福島大学国語教育文化学会、第四十七号、二〇〇〇年一月）及び『美しい星』読解の仮案——破綻の証明とその積極的評価『言文』（福島大学国語教育文化学会、第四十八号、二〇〇一年一月）。これらの論文発表後に見出した登場人物とキリスト教の関連について以下に述べる。主人公大杉重一郎の名前の「重一」は「一と一とを重ねる」の意で十字架をさすことが分かる。また、重一郎と敵対する羽黒一派と重一郎を裏切る長男一雄が四人で連れ立って歩く場面では「街の騒音は時折彼の耳にぱたりと絶え、遠い無数の蠅の唸りのようなものだけがこえた。」（第七章）と表現されている。蠅はキリスト教では悪魔の象徴である。このように、「美しい星」には作品をキリスト教の文脈で読解するようにとの語り手の示唆が散りばめられている。

2 本論文では「円盤に関わる言説を発表する活動や、円盤に関

心を持つ人々を集めて団体を形成する活動を行うこと」を「円盤運動」と呼び、このような活動を行う者を「円盤運動家」と呼ぶ。吉永進一も「円盤運動」という用語を用いている（吉永進一「円盤に乗ったメシア——コンタクティたちのオカルト史」。従来、これに類する用語としては「円盤愛好家」「ユーフォロジスト」「UFOコンタクティ」などがあつた。しかし、これらは「円盤」に対するそれぞれの立場とその価値観がすでに前提されている用語であり、本論文のように、相反する立場の人々のことも一括で呼び表したい場合には支障があるので用いない。また、「円盤」という呼称は、三島が「美しい星」で一貫して使用しているもので、これに従う。「UFO」という用語は、この用語が使用される以前の現象を指し示す際に支障があるので引用部以外では用いない。

3 島崎博・三島瑤子 共編『定本三島由紀夫書誌』（薔薇十字社、一九七二年一月）「第五部 蔵書目録」。以下「蔵書目録」と略記する。

4 「蔵書目録」の年数等の表記に誤記載と思われるものがある。このため、表記を統一すると書籍と「蔵書目録」との資料相互の参照がしにくくなる。したがって、この項のみ元となる資料の情報維持を最優先とし、「S」、「昭和」、西暦アラビア数字、西暦漢数字など年号等を改変統一せず混在表記のまま転記する。また、タイトル等も書籍と「蔵書目録」での表記に微妙な異同があるため、特に必要な場合を除き、本論文内で頻出する書籍名に關しては妥当と思われる省略表記とする。

5 この書籍のみ「国立国会図書館デジタルコレクション」の所蔵のデジタルデータを参照した（永続的識別子 info.ndljp/pid/2477899）。この書籍のデータは二冊所蔵されており、もう一冊は昭和29年8月1日発行と記載されている（永続的識別子 info.ndljp/pid/2468654）。共に版、刷の記載はない。本

論文では三島蔵書の発行年代に近いものを参照した。なお、引用箇所において二冊の間に異同は認められなかった。

6 『決定版 三島由紀夫全集 10』中の「解題」六四一ページによる。

7 『決定版 三島由紀夫全集 10』（新潮社、二〇〇一年九月）第四章一三ページ。以下「美しい星」本文の引用はこの全集からのものである。また、『決定版全集』と略記する。

8 現状でこれらの書籍について判明していることを以下に記載する。

・ケネス・アーノルド著「空飛ぶ円盤——われこれを見よ」とき」は Kenneth Arnold "The Flying Saucer As I Saw It" [Boise? Idaho, 1950] だと思われる。ケネス・アーノルドが自費出版したもので、現在入手困難である。

・ドナルド・キーホー著「空飛ぶ円盤は実在する」は Keyhoe, Donald E. (Donald Edward) "The flying saucers are real" [New York, Fawcett Publications, 1950] だと思われる。以下のサイトで復刻デジタル版を読むことが可能。「ISTA internet sacred text archive」(<https://sacred-texts.com/ufo/fsar/index.htm>)

・ウィリアム・ファアガソン著「宇宙よりのメッセージ」は "A message from outer space, William Ferguson" [Oak Park, Ill., Golden Age Press, c1955] だと思われる。これは、かなり特殊な書籍（手製のパンフレットの的なもの）で、一般に流通しておらず、著者のウィリアム・ファアガソン自体が日本ではあまり知られていない人物である。以下のサイトに簡単な記載がある。

「Kook Science Research Hatch」

(https://hatch.kookscience.com/wiki/William_Ferguson)

「William R. Ferguson (July 23, 1900?June 20, 1967) was an American promoter of relaxation therapies and contactee,

claiming to receive psychic messages from Khauga of Mars, which he promulgated through his Cosmic Circle of Fellowship. (以下及川による訳：ウィリアム R. ファアガソン (一九〇〇年七月二三日〜一九六七年六月二〇日) は、リラクゼーションセラピーとコンタクトイ (宇宙人との交流者) のアメリカ人プロモーターであり、火星のカウガからサイキック (超自然的な) メッセージを受け取ったと主張し、それを彼のコスミックサークルオブフェローシップを通じて広めた。)」 「Khauga the Comforter; Ferguson, William (1955), A Message from Outer Space: A Decoding of the Book of Revelation (the Apocalypse) of the Bible; This Book Was a Revelation of Jesus Christ Given to His Angel to Give It to John His Servant Who Was on the Isle of Patmos When the Revelation Was Given. (以下及川による訳：『カウガ、慰める者』ウィリアム・ファアガソン (1955)、宇宙からのメッセージ：聖書の黙示録の解読書。この本には、パトモス島にいたイエス・キリストのしもべヨハネに啓示を与えるためにキリストが彼の天使に伝えた言葉が書かれていた。)」 (及川註：…タイトルは、『聖霊カウガ』とも訳せるか。)

この内容から類推するに、「宇宙よりのメッセージ」は「Khauga the Comforter」という名称で出版されたこともあるようである。引用箇所は主人公重一郎が一般の受講者に円盤の概説を伝える場面である。ケネス・アーノルドとドナルド・キーホーの著作の紹介は妥当だが、ウィリアム・ファアガソンの著作はかなり特殊なもので、適当ではない。もしこの書籍の選択に語り手の意図を読み取るとすれば、ウィリアム・ファアガソンが円盤とキリスト教の「黙示録」を結び付ける主張をしていたためではないだろうか。つまり、ここにも作品をキリスト教の文脈で読解せよ、との

- 語り手の示唆を読み取ることができるともかもしれない。
- 9 猫山れーめ「解説」北村小松『火——少年科学防諜作戦——後編』JESFTV日本初期SF映像顕彰会、二〇一三年十二月、二〇〇ページ。
- 10 猫山れーめ「はじめに」北村小松『空飛ぶ円盤のあけぼの——北村小松UFO随想集』JESFTV日本初期SF映像顕彰会、二〇一一年十二月、六ページ。
- 11 北村小松「空飛ぶ円盤」『空飛ぶ円盤のあけぼの——北村小松UFO随想集』JESFTV日本初期SF映像顕彰会、二〇一一年十二月、三七ページ。
- 12 注11に同じ、「UFOに乗ったという四人」一二〇ページ。
- 13 注11に同じ、「空とぶ円ばんのなぞ」一六一ページ。
- 14 注11に同じ、「怪物か生物か」八〇ページ。傍線部は引用者。
- 15 「この小説を書く前、数年間、私は「空飛ぶ円盤」に熱中してゐた。北村小松氏と二人で、自宅の屋上で、夏の夜中、円盤観測を試みたことも一再にとどまらない。」三島由紀夫「空飛ぶ円盤」の観測に失敗して 私の本「美しい星」〈初出〉『読売新聞』一九五五年一月一日、引用は『決定版全集』32巻、六四九ページ。
- 16 北村小松『燃える空飛ぶ円盤——北村小松UFO小説集——』「太陽系13番惑星」JESFTV日本初期SF映像顕彰会、二〇一二年（初出）読売新聞社「週刊読売臨時増刊 特集・ナゾの事件その後」通巻16巻24号（一九五七年六月五日発行）
- 17 A・ミシエル著、田辺貞之助訳「訳者のことば」『空飛ぶ円盤は実在する』高文社、一九五六年六月、二五七ページ。
- 18 A・ミシエル「第一部 アメリカにおける調査」『空飛ぶ円盤は実在する』高文社、一九五六年六月、三三ページ。
- 19 『決定版全集』10巻 第四章一一三ページ。
- 20 A・ミシエル「緒言」『空飛ぶ円盤は実在する』高文社、一九五六年六月、七ページ。
- 21 注18に同じ、一四ページ。
- 22 注18に同じ、五五ページ。
- 23 注18に同じ、一一三ページ。
- 24 『決定版全集』10巻、一一三ページ。
- 25 注18に同じ、三七ページ。
- 26 『決定版全集』10巻、二二二ページ。
- 27 磯部剛喜「マゴニアの受難劇——三島由紀夫のコンタクトイ文学」主宰・巽孝之、発行人・立花真奈美『SF同人誌 科学魔界五〇号』二〇〇八年八月。
- 28 注18に同じ、三三ページ。
- 29 『決定版全集』10巻、一一二ページ。
- 30 注18に同じ、一二六ページ。
- 31 三島由紀夫「宇宙食「空飛ぶ円盤」」〈初出〉「社会料理三島亭」『婦人倶楽部』一九六〇年一月〜十二月。引用は『決定版全集』31巻、三九九ページ。
- 32 注18に同じ、四〇ページ。
- 33 注18に同じ、二八ページ。
- 34 A・ミシエル「第二部 旧世界における円盤」『空飛ぶ円盤は実在する』高文社、一九五六年六月、一三六ページ。
- 35 T・ベサラム著、久保田八郎訳「第二章 円盤の婦人機長」『空飛ぶ円盤と宇宙』高文社、一九五七年十一月、四〇ページ。
- 36 T・ベサラム「第七章 機長アウラ・レインズのフランス語の手紙と中国文筆蹟」『空飛ぶ円盤は実在する』高文社、一九五六年六月、一二〇ページ。
- 37 三島由紀夫「『美しい星』創作ノート」「仙台ノオト『美しい星』三島由紀夫」『決定版全集』10巻、六三五ページ。
- 38 田中美代子、「解題」中の三島の「創作ノート」より引用。『決

定版全集』10巻、六四三ページ。

39 吉永進一「円盤に乗ったメシア——コンタクトテイたちのオカルト史」一柳廣孝編著『オカルトの帝国』青弓社、二〇〇六年十一月。

40 吉永進一「序章 似て非なる他者 一 ブラヴァツキーと仏教」『神智学と仏教』法蔵館、二〇二一年七月、一〇ページ。

41 アントワヌ・ルフエール著、田中義廣訳「第四章 ロマン主義の知からオキュルティストのプログラムに」『エゾテリスム思想——西洋隠秘学の系譜』白水社、一九九五年二月、一一三ページ。

42 大田俊寛「第一章 神智学の展開」『現代オカルトの根源』筑摩書房、二〇一三年七月、五三ページ。

43 注42に同じ、五九ページ。

44 吉永進一「第二章 近代日本における神智学思想の歴史」『神智学と仏教』法蔵館、二〇二一年、七八ページ。

45 G・アダムスキ著・高橋豊訳「宇宙人との会見」『空飛ぶ円盤実見記』高文社、一九五六年、二一七ページ。

46 稲生平太郎『定本 何かが空を飛んでいる』国書刊行会、二〇一三年十一月。なお、稲生平太郎は奈良女子大学大学院人間文化研究科教授である横山茂雄のペンネーム。

47 稲生平太郎「6 私を涅槃に連れてって」『定本 何かが空を飛んでいる』国書刊行会、二〇一三年、五六ページ。傍線は引用者。

48 稲生平太郎「C 邦文文献篇（翻訳を除く）」『定本 何かが空を飛んでいる』国書刊行会、二〇一三年、一四一ページ。傍線は引用者。

49 堂本正樹・団精二・中園典明「座談会 日本円盤運動の光と影」『地球ロマン 十月復刊号（第一巻第四号）』絃映社、一九七六年十月一日。堂本正樹は劇作家、演出家、演劇評論家。三島由紀夫と親交があり、映画版『憂国』の演出を手掛けた。団

精二は小説家、博物学研究者である荒俣宏の翻訳家としての別名。

50 注49に同じ、一二六ページ。

51 注39に同じ

52 注39に同じ、二五一ページ。

53 「まえがき」平野威馬雄編『それでも円盤は飛ぶ——日本における空飛ぶ円盤』高文社、一九六〇年四月。傍線部は引用者。

54 平野威馬雄「未知なるものへの誘い」『それでも円盤は飛ぶ——日本における空飛ぶ円盤』高文社、一九六〇年四月、八ページ。

55 平野威馬雄「まず事実、それから真実を！」『それでも円盤は飛ぶ——日本における空飛ぶ円盤』高文社、一九六〇年、四三ページ。

56 注55に同じ、五〇ページ。

57 平野威馬雄「地球の崩壊をとなえる人々」『それでも円盤は飛ぶ——日本における空飛ぶ円盤』高文社、一九六〇年、六九ページ。

58 三島由紀夫「第五章」「美しい星」『決定版全集』10巻、一三四ページ。

59 注57に同じ、六九ページ。

60 平野威馬雄「円盤をめぐる研究グループ」『それでも円盤は飛ぶ——日本における空飛ぶ円盤』高文社、一九六〇年、一一四ページ。傍線部は引用者。

61 平野威馬雄編「UFOをめぐるつてなされた学者たちの研究と見解」『これが空飛ぶ円盤だ！』高文社、一九六〇年四月、四八ページ。

62 磯部剛喜「誤読された現代の神話」主宰・巽孝之、発行人・立花真奈美『SF同人誌 科学魔界五〇号』二〇〇八年、五四ページ。

63 山崎義光「二重化のナラティブ——三島由紀夫『美しい星』と

一九六〇年代の状況論——『昭和文学研究』第43集、二〇〇
一年九月。

64 注62に同じ、六六ページ。

65 小田垣雅也「第三章 現代神学の古典時代」『現代のキリスト
教』講談社、一九九六年十一月、一〇八ページ。

66 注65に同じ、一〇八ページ。

「美しい星」執筆時期近辺の年表（本論文で扱った事項のみを掲載）

西暦	和暦（昭和）	月	原書出版年	邦訳および日本の書籍出版年	三島の動向及び円盤への発言	CBAの動向
1950	25		ケネス・サーノルド著「空飛ぶ円盤—われこれを見るとき」 トナルド・キーパー著「空飛ぶ円盤は実在する」			CBAの動向については、他にもさまざまな出来事があるが、今回は「美しい星」の読解に関わるものを中心に最小限の事項を掲載するにとどめた。
1951	26					
1952	27					
1953	28		G.アダムスキ D.レスリー「空飛ぶ円盤発見記(George Adamski,Desmond Leslie, "Flying Saucers Have Landed")」			
1954	29		A.ミシェル著「空飛ぶ円盤は実在する(Aimé Michel"Leurs sur les Soucoupes Volantes")」 T.ベサラム著「空飛ぶ円盤と宇宙(Turman Bethurum, "Aboard a flying saucer. Non-fiction: a true story of personal experience")」 C.アリソガム著「火星からの空飛ぶ円盤(Cedric Allingham, "Flying Saucer from Mars")」			
1955	30		ウイリアム・フレーザー著「宇宙よりのメッセージ」			
1956	31		アダムスキ(G)、レスリー(D)「空飛ぶ円盤発見記」 ミシェル(A)「空飛ぶ円盤は実在する」		・現代生活の詩（初出）宇宙機・昭和32年7月…JFAの機関誌に寄稿 ・私を見た日本の小社会（初出）キング・昭和32年8月…6月9日活国際会議屋上で朝刊会に参加	
1957	32					
1958	33					5月16日 高尾山でUFOを7回目撃 7月1日 ラジオで船酔いの様子が放送 8月22日 CBA総会 権れに「トクナガ文書」が出る。
1959	34					3月 松村代表を降ろす。久保田代表に就任。 10月 小川定時代表に就任。
1960	35			平野威馬雄編「これが空飛ぶ円盤だ！」 平野威馬雄編「それでも円盤は飛ぶ！——日本における空飛ぶ円盤」	・社会料理三島亭（初出）婦人倶楽部・昭和35年1-12月…向かが飛んでいることは間違いない。	
1961	36	1	G.アダムスキ著「空飛ぶ円盤の真相(George Adamski, "Flying saucers farewell")」			
		2				
		3				
		4				
		5				
		6				
		7				
		8				
		9				

		10			・北村小松宛昭和36年10月01日…「アメリカ土産、最新情報」 ・11月10日北村小松訪問、11月11日北村氏訪問 ・昭和三十六年十一月十四日に「美しい星」起稿	
		11				
		12				
1962	37	1				
		2				
		3				
		4				
		5				
		6				
		7				
		8			昭和三十七年八月三十一日に「美しい星」脱稿	
		9		「火星スキ (6)」「空飛ぶ円盤の真相」		
		10				
		11				
		12				
1963	38					チゾサン古墳事件
		39			・「空飛ぶ円盤」の観測に失敗して—私の本「美しい星」〈初出〉読売新聞・昭和39年1月1日…現れないので一個の基幹上の観念だと信じた ・空飛ぶ円盤と人間通北村小松氏のこと〈初出〉朝日新聞・昭和39年4月30日…北村と屋上で観測を行った思い出	ハヨピラ・ピラミッド建設開始
1964	39					
1965	40					
1966	41					
1967	42			「マリソカム (6)」「火星からの空飛ぶ円盤—一巻・空飛ぶ円盤実見記」	・二つの遺跡〈初出〉毎日グラフ別冊・昭和42年5月1日…北村と屋上で観測を行った思い出	ハヨピラ・ピラミッド完成セレモニー
1968	43					
1969	44				・三島氏にズバリ10問〈初出〉小説ゼン・昭和44年7月…半ば信じられなくなったとき書こうと思った	
1970	45				1970年(昭和45年)11月25日 死去	